

ハインツ・インス・フェンクルの 『幽霊となった兄弟の思い出』における仲介者

早川 真理子

キーワード：仲介者、子ども、コリア系アメリカ文学

I. はじめに

コリア系アメリカ人作家ハインツ・インス・フェンクル (Heinz Insu Fenkl, 1960-) ²⁾の自伝的小説『幽霊となった兄弟の思い出』 (*Memories of My Ghost Brother*, 1997) の後半には、中学卒業間近の主人公インス (Insu) がバスに乗り、家から離れた米軍基地で暮らす父親の元へと一人で向かう場面が描かれる。彼がその地を訪れる理由は、母親の病状を父親へ伝えるべく、母方の叔父から命じられたためである。「なんだ？ これは重大な業務だ！ お前が行って、母さんが病気だって伝えるんだ。だが、他のことは言うてはならない。お前の父さんは、[お腹の中にいる] 息子が流産したと知ったらひどく怒るだろうからな。」(245) このように告げる叔父の心配の矛先は、韓国人であるインスの母親の体調には向いてはいない。むしろその矛先は、アメリカ人である父親の気分を害することなく、滑らかに伝達をする必要がある、インスの「重大な業務」へと向けられている。このように、韓国とアメリカの間で成長する少年インスは物語を通して、仲介者または媒介者としての役割を担っている。本稿では、仲介者という言葉を用いていく。

アジア系アメリカ人の子どもにとって、仲介業務を行いながら成長していくことは珍しいことではない。ジュリアナ・チャン (Juliana Chang) は、家族経営の仕事を持ち、仕事と家庭生活を分けることが比較的少ないアジア系移民の家族の中で、子どもたちは、家族と公共の場との橋渡しの役割を担い易いことを述べている。「これらの子どもたちは仕事の中において、また、

彼らが仕事なのである」(Chang 20)。また、スーチェン・チャン (Sucheng Chang) やケヨン・パーク (Kyeyong Park) は、祖国の文化や言語能力を維持しながら幼少期や青年期に渡米するアジア系アメリカ人一・五世代について、彼らは若いうちに祖国とアメリカ両方の文化を吸収するため、本人が望むかどうかにかかわらず、異なる世代間や異なる人種間で器用に振る舞い、文化的仲介者として行動することが期待されていることを述べている (Chan xiv, Park 141)。

『幽霊となった兄弟の思い出』の最終章でインスが渡米する様子が描かれるところから、彼が今後、多くのアジア系移民の子どものように仲介者となっていくことが仄めかされている。しかし、本作品の主な舞台はアメリカではなく、1960年代から70年代初期にかけての韓国の仁川、富平地区である。さらに、小林富久子が本作品を「基地文学」に分類するように (小林 95)、韓国内の米軍基地周辺で物語は展開されている。インスは、アジア国籍の親とアメリカ国籍の親との間に生まれた子どもの中でも、特にアジア人女性とアメリカ兵の子どもの指すアメリカン (Lee, “The Black Amerasian” 8) である。そのような彼が、米軍基地周辺で発展してきた米軍キャンプで生まれ育ち、最終的に渡米するまでが、幼少期の頃の視点と大人になり全てを知った後の視点という、二つの異なる彼の視点から語られている。

ここで先行研究を見てみると、作中で描かれる米軍基地を取り巻く業務として、基地周辺で働かざるを得ない状況に置かれた韓国人女性の犠牲に言及する研究者は少なくない³⁾。しかし、アメリカンであるインスもまた、仲介者として業務を行っている。本論文では、インスが成長と共に、どのように仲介者として確立されていくのか考察する。そして渡米前の彼が、既に韓国とアメリカの間で重要な役割を担う存在であったことを示すと同時に、仲介者となる過程で浮かび上がる様々な問題を明らかにする。

II. 仲介者としての目覚め

インスは幼少期から、周りの人々をよく観察する人物であると同時に、人々の気持ちを汲み取り寄り添うことができる人物として描かれている。例えば4歳の彼は、従姉妹のガンナン (Gannan) が家で悲しむ姿を目撃した時、彼女がアメリカ兵の男性に結婚を拒まれたことを素早く察知する。そして「胸の内側にある何か音が立てて沈んでいく」感覚を感じ、一緒に涙を流したい気持ちに駆られる。しかし彼はそのような気持ちを押し殺し、「歌えば幸せになるんだ」と告げると、彼女を励ますために歌い続ける (10)。このような彼の洞察力と共感力は、周りの人間に対してのみならず、この物語に度々登場する幽霊たちにも向けられており、仲介者としての彼をつくり上げていく。

インスと共に暮らしている登場人物は、韓国人である母、母の姉家族、従姉妹のガンナン
の6人である。彼らは、植民地時代に気性の荒い日本人大佐が建築し、その後も数え切れない
ほどの人々が亡くなったという恐ろしい噂が絶えない屋敷の一部屋に、賃金が安いというのみ
の理由で共同生活をしている。インスの父親はアメリカ兵であり、非武装地帯付近に位置す
るキャンプ・キャセイという、警戒態勢が最も強化された基地（Okazawa-Rey 3）に住み込みで
働いているため、ほとんど家に帰ってくることはない。そのようなインスと彼の家族の暮らし
の中で特徴的なのは、女性が働いて家計を支えている点である。共に暮らす唯一の大人の男性
である叔父は働かずに飲み歩き、後に脳震盪が原因で歩くことも不可能になる。そのため、イ
ンスの母とガンナンが外でお金を稼ぎ、叔母がインスを含む子どもたちの世話や家事を行うと
いうそれぞれの役割を設け女性同士で連帯しながら生活を送っている。

インスの母とガンナンは、共に米軍基地に通いながら働いている。母は元娼婦であり、結婚
後の現在は、アメリカ兵の妻という特権を利用して駐屯地売店で品物を買付け、それらを基
地の外側にある闇市で売る商売を行っている。一方でガンナンは、娼婦としてお金を稼ぐた
めに、米軍基地のゲート前で兵士の出待ちをする。この二人のように、当時、米軍基地周
辺で働く女性は少なくなかった。1960年代は米軍キャンプが最も繁栄した時代であり、「3
万人以上の女性が、韓国内に建てられた基地に駐留する6万2千人ものアメリカ兵たちを
相手に生計を立てていた」（Yuh 21）。そして、このような女性たちの背景には、朝鮮
戦争が原因で生活基盤が破壊されたことや、夫を失い寡婦になったなど、やむを得ない理
由が存在していた（林 151）。インスの叔母が、「……戦前、私たちは十分な暮らしをして
いた。」「これまでと同じ量のお米さえ収穫できれば、彼女〔ガンナン〕は田舎に留ま
ることができたのに。」（14）とインスの母と共に嘆いているように、彼女たちもまた、
朝鮮戦争後に仕事を求めて出てきた女性たちと同様であることが分かる。しかし、基
地周辺へ出てきたにもかかわらず、彼女たちが十分な生活を送れていないことは、一
家がさらに安い物件を探し、米軍キャンプ周辺で移動を繰り返していくところから垣
間見える。

インスは、そのような暮らしに対してひそかに涙を流す叔母を台所の後ろで眺めなが
ら、仲介者になることを決意する。

I promised to myself that when I grew up and became a dark-haired GI, I would make lots of
money and buy everyone everything they wanted so they would be happy always. We would have
servants so Emo [Insu's aunt] wouldn't have to work in the kitchen; Mahmi [Insu's mother] could
not stop going to the PX to buy things for other people; Hyongbu [Insu' uncle] would have his
American cigarettes and whiskey. And my father, by then, would surely be a great general with

white hair and a beard instead of only his short yellow hair. ... Then they would give me a green uniform and a cap—I would be a GI. I could go America to see many, many PX's, NCO Clubs, and all the tall people in green with their sharp, pulled-out noses. (19)

米軍基地の存在の背景にある、アメリカ兵と韓国人女性との間にある不平等な関係性をまだ理解していないインスは、純粹に、富の象徴と見られるアメリカに所属することが家族に幸せをもたらすと考える。しかし、これは単に彼がアメリカ人になるということではない。インスが将来の自分の姿を、父親のような“yellow-haired GI”とは異なる“dark-haired GI”として想像するように、韓国性とアメリカ性の両方を兼ね備えた両国間の仲介者になることを希望していることが読み取れる。

このようなインスが日常的に、仲介者の立場に立ち行動をすることは少なくない。例えば、彼は韓国語と英語を理解できるため、韓国人の家族とアメリカ人である父親の間で通訳を行う。しかしそれだけではなく、韓国とアメリカ間で交わされる、より深刻な場面で仲介業務を行っている。

まず彼は、母親と父親の間で業務を行う。父親に連れられて基地の軽食堂を訪れる時、インスは目線の先に、タクシーから降りてくる母親の姿を目撃する。彼は、母親が基地の内と外での仕事を父に隠していることを認識しており、告げ口をしないよう固く口止めをされている。一方で、父親が、韓国人である母親が基地に出入りすることに対して嫌悪感を抱いていることにも気が付いている (69、131)。そのため彼は、この場で二人を対面させてはならないことを素早く察知し、二人の間を取り持つために、父親の注意を母親から逸らそうと試みる。

“Hwuk you, maddahwukka! Hwuk you! Eat my shet!” I waved my ice cream in one hand and thrust the middle finger of my other hand into his crotch. I heard the GIs laughing and a loud “Hey!” from my father behind me. Then, before I quite knew what had happened, I was lifted into the air, my ice cream splattering on the sidewalk, and I felt a terrible, hot pain on my backside again and again. I heard the loud slaps of my father’s giant palm against the thick leather seat of my pants and his tremendous voice, saying, “Don’t you *ever* do that again, you son of a bitch!” and just before my vision blurred as I burst out crying over my father’s shoulder, I saw Mahmi’s taxi driving off down that street. (74 強調は著者のもの)

両親のために起こした行動であるにもかかわらず、行儀の悪い態度を取ったインスは、激怒した父親から激しく叩かれ、泣き出す。しかし、最後の一文からは、インスの冷静さが読み取れ

る。彼が視界の片隅で、母が上手くこの場を切り抜けられたかどうかを把握しようとする姿からは、この一連の出来事が、彼が行うべき業務であったということが確認できる。

次に、インスは韓国家族とアメリカ兵との間で仲介業務を行っている。彼の従姉妹であるガンナンはアメリカ兵の子どもを妊娠するが、男性側が結婚を拒否したため、お腹の赤ん坊と共に自害をする。インス自身、その兵士の横柄な態度には以前から嫌悪感を抱いていた。さらに、妊娠をしたことで毎晩涙を流していたガンナンや、悲嘆に暮れた面持ちの母や叔母が小声で議論をする姿を頻繁に目撃していた。状況を素早く理解するインスは、その兵士が見舞金を渡すために家を訪れた時、お金を受け取るだけでなく、幽霊となったガンナンが復讐をすることができるように、彼女の服の切れ端を彼に渡し、怯えさせる。その後、叔父が教えたと考えられる「悪質なジェスチャー」をする (30)。このように彼は仲介者として、一家の怒りを代弁するのである。

しかしながら、彼が仲介者としての業務を行い始めることは、彼自身が希望しているような、韓国性とアメリカ性を重ね合わせた人物へと向かい始めているという意味にはならない。それは、彼が考える自身のアイデンティティと周りが彼に対して捉えるアイデンティティの間でずれが生じているからである。例えば、主に韓国人の子どもたちが通う日曜学校で彼は、父親がアメリカ人であることや、他の子どもたちよりも韓国語の読み書きが劣っていることから“Hello, give me cho-co-late” とからかわれ、同級生との違いを感じる (77)⁴⁾。また、韓国人の叔父が彼に対して“... like you Yankees” (40) と告げることは、インスが韓国人とは異なるということの暗示である。さらに、彼は母の日焼けした肌の色と、自身の明るい色を比較し、母親との違いも認識する。そして、そのような周りの人々との差異に対する不安から、自身を「よそ者」であると感じている (79)。このようにインスは、アイデンティティに関する不安を抱えながら、仲介者としての自身を構築し始めていくのである。

III. 仲介者という居場所

5歳までのインスは、韓国人である母親や母の親戚の近くで日々を過ごしている。しかし6歳になると、一人バスに乗り、米軍基地に隣接するアメリカン・スクールへ通い始める。次第に彼は、支配者としてのアメリカと、それに従わざるを得ない韓国という、不平等な関係性を理解し始めていく。

まず、アメリカン・スクールを通して、インスがそのような関係性の中に置かれている様子を見ていくことにする。彼をその学校へと通わせるよう命じたのは、父親である。父はインスに対して日頃から、西洋の教育を受け、マナーを身に付けることを促している。例えば、イン

スが韓国訛りの英語を話す際、彼はその都度、発音を矯正する (68、69)。また、一緒に食事に出かける際には、ナイフとフォークを使う西洋のテーブルマナーをインスに伝授している (128)。父が西洋の教育に固執する理由は、インスが、将来はアメリカ側に立つ人間になることを望んでいるためである。それは、父親がインスの誕生日に息子を本屋に連れて行き、ラドヤード・キプリング (Rudyard Kipling) の小説『キム』 (Kim, 1901) を丁重に贈る場面からも推測できる。その物語の主人公キムは、英領インドとイギリスという二つの文化に溶け込みながら成長していく少年であり、ある年齢になると、インドに設立された白人のための学校に入学する。そして最終的に、植民地政策に関わるイギリスの諜報機関の一員となっていく。エドワード・サイード (Edward Said) は、『キム』が「帝国主義や帝国主義の意識的な正当化を表象している」作品であることを強調する (270)。このようにインスの父親は、最終的には帝国側に立つキムに、インスを重ね合わせようと試みている。

確かに以前、インスはアメリカ人としての自己を獲得することを望んでいた。「私はアメリカン・スクールで、父の世界について何か学べるだろうと信じていた。つるつる滑りやすい英語を話すのに私よりも適した舌を持ち、金色の髪と青や緑色の目、白い肌の子どもたちにまつわる神秘的な何かがあると信じていた。私は、アメリカには何か壮大で魔法のようなものがあると信じていたのだ……。」 (92) というインスの回想からは、入学以前の彼が、アメリカのことを吸収することに対し、高い理想を抱いていたことが確認できる。しかしその後、「同じ境遇の子どもたちのように、私は以前よりも乾いた状態で去っていったのである。」 (92) と付け加えるように、彼の理想は現実とはかけ離れたものであった。

インスは学校で、「ハインツ」という名で過ごし、アメリカの国歌を歌い、星条旗に忠誠を誓うことを学ぶ。また、韓国語を話す度に教師から注意を受け、それが校則違反へと変容していくというように、完全なアメリカ性が求められる場で学校生活を送る。同級生たちは、韓国語禁止の規則は滑稽であると感じ、あざ笑う。しかしインスは、自身の母語を「汚い言葉」 (116) と告げる教師や、韓国性を削ぎ落とそうとする校則に疑問を示し、居心地の悪さを感じ続けている。例えば彼は、他のアメラジアンの子どもたちと共に人目の付かない場所に集合し、韓国語を大声で叫び、アメリカ人に対して悪態をつく (115)。また、アフリカ系アメリカ人と韓国人の子どもでもあるジェームズ (James) と共に「永遠に飛び続けているかのような」 (114) 一瞬の解放感を求めて運動場のブランコに乗り、高く振り上がる。さらに、インスとジェームズ二人が故意に学校を遅刻する場面では、彼らは軽食堂で仕入れた木製のマドラーを何本か用いて、まるで彼ら自身の状況を示すかのように、無意識のうちに小動物を囲い込むフェンスをつくり上げる。エリク・H・エリクソン (Erik H. Erikson) は、「偽装した見かけの役割」に戸惑う「青年は、さまざまな形の逃避を企てる」 (115) ことを述べる。二人はまだ子

どもであるが、アメリカに同化を強いられることに疑問を示し、抵抗する。このようにインスは、キムのような人物と重なることはない。

続いて、インスは父と母とを観察しながら、アメリカ兵と韓国人女性との間にある従属関係について理解していく。インスは、父が母を米軍基地から遠ざけようとする様子から、父は韓国人である母に恥ずかしさを抱いていると共に、アメリカ人としての父の権力を弱める存在であると思っているのを感じ取る（131）。一方で、そのような考えを持つ夫に配慮し、母が米軍基地の内と外での商売を秘密にし続けていることも、彼は把握している（73）。またインスは、望まない妊娠をし、その後流産で苦しむ母親の姿を目撃している。彼女が無事に出産出来なかった理由は、さらなる息子を欲しがった父親が、女の子を出産して間もない彼女の体調を考えず、再度妊娠させたためである。点滴の紐が繋がれたまま目を閉じ、「全てにおいて疲れたかのような」面持ちで横たわる母親を見ながら、インスは絶望感を感じ、むせび泣く（244）。さらに彼は、父と母が共に隠してきた、彼が一度も会ったことのない兄クリスト（Kuristo）の存在に気付く。その中でインスは、母が父と結婚をするためには、父の実の子どもではないクリストを手放さなくてはならなかったことを知る。母は、クリストを孤児院に預けた後も、何度も施設を訪れ取り戻すことを試みたが、彼は養子として渡米し、二度と戻ってくることはなかったという。インスの父が母を支配していると考えられる一方で、母は、アメリカ兵の妻という立場を保持するため従順な態度を示している。

このような関係は、インスの父と母のみに当てはまる訳ではない。例えば、作中に登場するチャンミ（Changmi）の母親は、子どもを授かることができないアメリカ兵の夫をつなぎ止めるため、夫とよく似た男性を探し出し、妊娠することを企てる（209）。またジェイムズの母親は、アメリカ兵の男性と再婚をするために、自身の子どもの溺死させる（211）。さらにインスの従姉妹ガンナンは、アメリカ兵の男性に結婚を拒否され、お腹の赤ん坊と共に自害することを選択する（24）。すなわち、彼女たちのような境遇の韓国人女性は、戦後、「家族の経済的困難を克服するために」（Park 120）アメリカ人である夫に従属せざるを得ない状況に置かれていたのである。

このような両国の関係性を観察すると共に体験するインスは、アメリカへの同化は選ばない。むしろ彼は、両国の間で居場所をつくり上手く渡り歩いていくため、仲介者となる。「私が学校で学んだことはとても少なかった。しかしそれを知らずとも、私の母が、父の世界で一人でも上手くやっていく方法を教えてくれたのだ」（121）というように、インスは学校に通いながら、母親のように基地の内と外での商売を始めていく。それは、注文を受けたM&Mチョコレートやアメリカ製の胃薬、ハーシーチョコレートやリグレーのガムなどを基地の売店で買いつけると、基地の外側で暮らす韓国人の知り合いに二倍の価格で売るという仲介業務である

(183)。

母親と同じ商売を行うことは、インスが韓国側に自身を重ね合わせているようにも読み取れる。実際に彼はアメリカ軍専用バスに乗りながら、土埃でよごれた身なりの韓国人の子どもたちを窓越しに眺め、自身を彼らに重ね合わせている (247-8)。しかしその後ふと我に返り、アメリカ軍のバスに乗っている自身を自覚するところから、彼は韓国にも所属することができてはいないように考えられる。そのような彼は次第に家から足が遠のき、家の外で過ごすことが多くなる。そして中学を卒業する頃には、「まるで次の取引について話す中年の闇取引」(264)のような、大人びた雰囲気醸し出すまでになるのである。

IV. さらなる犠牲者との共鳴

米軍キャンプで過ごしてきたインスは、中学卒業間近にアメリカへと渡る。渡米する理由は、彼の父親が、インスや生まれたばかりのインスの妹を「未開であると共に異教徒」である現在の場所ではなく、より「適切」な土地で育てたいと願ったからである (239)。一方で母親は、病気で先に渡米することになる夫に対し、もはや愛情はない。しかし、何年も前に養子として手放したインスの兄クリストを探し出すという新たな希望を抱き、渡米に期待している (268)。このような両親に伴って、インスが旅立ったことが示されている箇所が次の二つの文章である。

When the time came I went not with a struggle but like a dutiful son. I went the way I had seen Korean prisoners march to their execution in movies about the Japanese Annexation, with determination and grief and a sense of hopeless purpose. (269)

But there was no other way. Sitting there one day, flooded in sound and tears, with the scent of tragedy and nostalgia mixed together in my memory, with the bitter taste of metal and blood in my mouth, the texture of sorrow at my fingertips, shadows falling over the darkness of my heart, I was helpless and prepared to leave. (270)

インスの渡米への思いは、両親のものとは異なっている。実際に彼は、「私は、自身が韓国を去りたくないと思っていたことを知っていたのだ」と述べている (269)。また引用箇所からは、渡米に対する自身の悲しみや絶望感を、彼があらゆる感覚を通してはつきりと認識していたことが読み取れる。しかし、「従順な息子」や「捕虜」のように自身の感情を押し殺して出

発したという部分からは、渡米するという行動自体が、仲介者としての業務にほかならなかったことが推測できる。

それならば、インスが渡米に対してこれほどの悲しみを示すのはなぜだろうか。その理由はアメリカと韓国の従属関係を知った彼が、アメリカを希望の国として見なくなったことが考えられる。両国の間でアメラジアンの子どもたちが困惑する様子を目撃してきたことや、成長過程を通して、仲介業務自体が様々な犠牲を伴うということに気が付いたためだとも考えられよう。

インスは、多くのアメラジアンの子どもたちが仲介者となった後、犠牲者となる姿を目撃している。例えば、インスは、人種差別が原因で亡くなるジェイムズについて耳にする (229)⁵⁾。彼は、白人のアメリカ兵と再婚をした母親が夫との関係を保つため、アフリカ系の血を引く息子ジェイムズを溺死させたことに、「これでもかという屈辱感」を感じ、ただただ座り込む (230)。また彼は、金髪の友人ジャニが亡くなった知らせを受けている (171-3)。父親をヴェトナム戦争で亡くしたジャニ (Jani) は、母親が新たなアメリカ兵の夫を見つけると、アメリカン・スクールへ入学させられる。その際、彼の学力と周りの子どもたちとの学力が合わないことに気付く母親は、彼の年齢から4年を引き下げる。母に消去されたその4年間は渡米後も埋め合わせられることなく、彼は若くして病で亡くなっていく。ジャニの死の知らせを聞くインスが異様にその年齢にこだわる理由は、ジャニの犠牲が少しでも報われたかどうかを知るためであろう。さらに、インスは、父親に養育を拒まれた後に孤児となり、その後、養子として渡米した兄クリストの存在に気付く⁶⁾。クリストはインスの夢の中に幽霊として登場しており、インスを含む家族全員を悲劇から救う救世主として描かれる (246-7)。しかし、その夢が暗示するものは、インスが生まれる代わりにそこから去らなくてはならないという彼の犠牲である。

このように犠牲となったアメラジアンの子どもたちを認識するインスは、「……私の悲しみは、亡くなった幽霊たちに対してであった」(201)と、その後、幽霊として登場する彼らと心を重ね合わせている。

Everyone so quickly tried to forget. The ghosts of the drowned maid and the drowned baby, the ghosts of all my friends who had gone forever—I often saw them in my dreams and they were always so lonely. (201)

この文章には、幽霊となった子どもの存在は、人々にすぐに忘れ去られることが示されている。確かにインスの父は、クリストのことを「でたらめな夢」と吐き捨て、その存在を無かつ

たことにしている (258)。またジェイムズの母は、白人のアメリカ兵との間に天使のような娘を授かった後には、「ジェイムズの母」と呼ばれることに嫌悪感を示す (211)。グレイス・チョウ (Grace M. Cho) は、アメリカの帝国主義が背景に存在する場所において幽霊は、戦争の忘却や、消去という認識的な暴力が原因で生み出された、消失の結果を表していることを述べている (31)。しかしグレース・ホン (Grace Kyungwon Hong) によると、幽霊は完全に消えている訳ではない (49)。そしてエイブリー・ゴードン (Avery Gordon) は、幽霊を物語として描くことは、そのような「排除と不可視性」を明らかにすることだと説明している (17)。ここから、幽霊を見ることが出来ると共に、心を通わせられるインスは、とりわけ大人が忘れようと努める子どもの犠牲を明示していく存在だといえる。

そして、インスは子どもの犠牲を明らかにする存在であるだけでなく、多くの子どもたちと同様に仲介者であり、犠牲者である。彼が被る犠牲はまず、幼い頃から周りの人々の関係を円滑に結びつけ、物事を上手く進めていくために自身の心情を置き去りにせざるを得ないことである。また、韓国にもアメリカにも居場所を得られない状況下で、自身をよそ者としか捉えられない様子から、アイデンティティに対する不安を常に感じ続けているところでもある。さらに、彼が中学卒業前であるにもかかわらず、「中年の闇取引」(264) のような雰囲気醸し出すまでになるように、子どもが知るべき以上の物事を見聞きすることで、子どもらしさを早くに無くしていく部分であるとも考えられる。

インスは渡米の当日、悲しみを感じながら、犠牲となった韓国人やその子どもたちの名前を思い浮かべている。それだけでなく、彼らの姿を一人ひとりの物語として思い出す。そして、最後に自身の物語を思い起こしながら、「私は思い出す。私は思い出した。私は思い出さだろう。」(271) と感じている。インスがこのように、自身を含む多くの子どもたちを忘れず思い出し続ける理由は、それが彼らに報いることであり、彼が大人に対して取ることのできる数少ない抵抗だからであると思われる。

V. おわりに

本論文では、インスの成長過程で行われる仲介業務に注目し、渡米前の彼が、韓国内で仲介者として確立されていく過程を考察してきた。

著者フェンクルは、インタビューの中で、様々な国を見た後に韓国について理解し始めたことを述べており (Leyshon)、それは主人公インスにも重なることのように考えられる。インスは最終的に、大人びた雰囲気醸し出すような人物として描かれるが、年齢的には未だ子どもである。本作品が、彼の幼少期の頃の視点と共に、大人になり全てを知った後の視点からも語

られる二重の構造になっているように、インスが韓国で暮らしていた期間に全てを把握していたと考えることは難しい。しかし、そのような子どもの段階で、仲介者となり犠牲者となる。

フェンクルは、作品内で多くの人々の物語を描きながら、アジアに建てられた米軍基地の存在を浮き彫りにしている (Kim 3, Lee, “An Amerasian Rewriting” 338)。その方法の一つとして彼は、幼少期から仲介者とならざるを得なかった、インスのような子どもたちの姿を描いたのである。

注

- 1) 本稿中の訳はすべて引用者によるものである。
- 2) 著者ハインツ・インス・フェンクルは、韓国に生まれ数年を過ごした後、12歳でドイツ、そしてアメリカへと渡った作家である。彼はアジア系アメリカ文学に分類される小説執筆だけではなく、朝鮮半島で出版された数々の詩や小説、漫画を翻訳しアメリカに伝えていると同時に、アンソロジーの編集も行う横断的人物である。フェンクルは、幼少期だけでなく渡米後も、大学を卒業すると、民俗学とシャーマニズムを学ぶために研究員として韓国へ赴き、その後アメリカに戻り、現在はニューヨーク州立大学英語学科で教鞭を執っているというように、常に複数の国の間に身を置き、一つの場所には留まらない暮らしを送っている。このような彼が執筆した自伝的小説が、『幽霊となった兄弟の思い出』 (*Memories of My Ghost Brother*, 1997) である (“Heinz Insu Fenkl”)。
- 3) 例えばクンジョン・リ (Kun Jong Lee) は、アメリカ軍の兵士たちにとってガンナンのような娼婦は、商品以上の人物として捉えられることはなく、米軍キャンプ内で安価な業務を行う人物の一人に他ならなかったことを述べている (Lee, “An Amerasian Rewriting” 332)。またグムヒ・パーク (Geum Hee Park) は、ガンナンやインスの母などの娼婦たちが頻繁に死に追い込まれる背景には、アメリカの植民地主義やアメリカと結託した韓国政府、韓国内の家父長制によって「歪められたジェンダー意識」(120) の存在が潜んでいたことに言及している。
- 4) この状況は、ミュンミ・キム (Myung Mi Kim) の “A Rose of Sharon” の中で、語り手の少女が同年代の韓国人の子どもたちに仲間外れにされ困惑する状況と類似している。
- 5) 長畑明利は、アメリカ国内で起こる人種差別は「アジアの地でも繰り返され、アメリカ人の GI たちは韓国を軽蔑し、アメリカ人のコミュニティの中でも人種による差別が横行」していたことを述べている (277)。また、クンジョン・リは、韓国生まれのアフリカ系のアメラジアンは、アメリカによって「故意に忘れられてきた」 (Lee, “The Black Amerasian” 8) ことに言及している。
- 6) 孤児となった後に養子として渡米するアメラジアンの姿は、コリア系アメリカ人作家チャンネ・リー (Chang-Rea Lee) の作品『最後の場所で』 (*A Gesture Life*, 1999) の登場人物サニー (Sunny) とも重なる。朝鮮に生まれたアフリカ系の血を引く少女サニーは、孤児院に入れられた後、養子としてアメリカに渡ったことが書かれている。

引用文献

- Avery, F. Gordon. *Ghostly Matters: Haunting and the Sociological Imagination*. New U of Minnesota P, 2008.
- Chan, Sucheng. *The Vietnamese American 1.5 Generation: Stories of War, Revolution, Flight, and New Beginnings*. Temple UP, 2006.
- Chang, Juliana. *Inhuman Citizenship*. U of Minnesota P, 2012.
- Cho, Grase M. *Haunting the Korean Diaspora: Shame, Secrecy, and the Forgotten War*. U of Minnesota P, 2008.
- Fenkl, Heinz Insu. *Memories of My Ghost Brother*, Plume Printing, 1996.
- “Heinz Insu Fenkl.” *Words Without Borders*. www.wordswithoutborders.org/contributor/heinz-insu-fenkl.
- . *The Interstitial Arts Foundation*. http://interstitial.dreamhosters.com/archive/who/heinz_fenkl.html.
- Hong, Grace Kyungwon. “Ghost of Camptown.” *MELUS*, vol. 39, no. 3, 2014, pp. 49–67.
- Kim, Elaine H. “In the Aftermath: Korean American Survivals of U.S. Wars in Asia.” *ALA Journal*, no. 7, 2001, pp. 1–11.
- Kipling, Rudyard. *Kim*. 1901. EBSCO eBook Collection.
- Lee, Chan-Rae. *A Gesture Life*. Granta Publication, 1999.
- Lee, Kun Jong. “Heinz Insu Fenkl’s *Memories of My Ghost Brother*: An Amerasian Rewriting of Rudyard Kipling’s *Kim*.” *Journal of American Studies*, vol. 42, no. 2, 2008, pp. 317–40.
- . “The Black Amerasian Experience in Korea: Representations of Black Amerasians in Korean and Korean American Narratives.” *Korea Journal*, vol. 55, no. 1, 2015, pp. 7–30.
- Leyshon, Cressida. “This Week in Fiction: Heinz Insu Fenkl.” *The New Yorker*, 27 Jul. 2015. www.newyorker.com/books/page-turner/fiction-this-week-2015-08-03.
- Myung Mi Kim. “A Rose of Sharon.” *The Forbidden Stitch: An Asian American Women’s Anthology*, edited by Shirley Geok-lin Lim, and Mayumi Tsutakawa, Calyx Books, 1989.
- Okazawa-Rey, Margo. “Amerasian Children in GI Town: A Legacy of US Militarism in South Korea.” *Asian Journal of Women’s studies*, vol. 3, no. 1, 1997, pp. 71–102.
- Park, Geum Hee. “Necropolitics and Trauma in Heinz Insu Fenkl’s *Memories of My Ghost Brother*.” *Modern Studies in English Language & Literature*, vol. 64, no. 3, 2020, pp. 111–38.
- Park, Kyeyong. “‘I Really Do Feel I’m 1.5!’: The Construction of Self and Community by Young Korean Americans.” *Amerasia Journal*, vol. 25, no. 1, 1999, pp. 139–63.
- Yuh, Ji-Yeon. *Beyond the Shadow of Camptown: Korean Military Brides in America*. New York UP, 2002.
- エリクソン, エリク・H著『自我同一性——アイデンティティとライフ・サイクル』小此木啓吾訳、誠信書房、1973年。
- 小林富久子「5 コリア系アメリカ文学の流れ——断片化された記憶から紡がれる亡命者たちの語り」『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』山本秀行、村山瑞穂編著、世界思想社、2011年、85–103頁。
- サイード, エドワード・W著『文化と帝国主義』第一巻、大橋洋一訳、みすず書房、1998年。
- 長畑明利「第12章 多文化主義と混血化——21世紀の人種のるつぼ」『アメリカ文学史入門 植民地時代から現代まで』亀井俊介編、2006、261–80頁。
- 林博史『米軍基地の歴史 世界ネットワーク形成と展開』吉川弘文館、2012年。